

人間・この劇的なもの

福田恆存



人間・この劇的なるもの

中公文庫 ©1975

昭和五十年五月十日初版
昭和六十一年九月二十日八版

著者 福田恆存

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七

振替東京二―三四

ISBN4-12-200132-3

定価 一六〇円

中公文庫

人間・この劇的なもの

福田 恆 存 著



中央公論社

人間・この劇的なもの

—

愛は自然にまかせて内側から生れてくるものではない。ただそれだけではない。愛もまた創造である。意識してつくられるものである。

女はそうおもう。自分はいつでもそうしてきた。だが、男にはそれがわからない。かれは自然にまかせ、自然のうちに埋没している。愛はみずから自分を完成するものだ、そうおもっている。だから、男は手を貸そうとしない。女は疲れてくる。すべてはひとりずもうだったとおもう。もうこれ以上、がまんはできない。別れるときがきたのだ。女はものうげに別れ話もちだす。男にはまだわからない。女は説明しようとする。「完璧な瞬間」というものについて、その実現を用意する「特権的状态」について。女は子供のときに愛読した歴史本について話す。

「それには挿絵がほんの少ししかなかった。一卷にせいぜい三、四枚だったかもしれない。でも、そのところは、みんな一頁分とってあって、裏にはなににも刷ってないの。ほかの文

章のところは二段組で一杯つまっていただけに、それが、なおさら印象的にみえた。あたしは、その挿絵がたいそう気に入った。どれもみんなおぼえていて、そのミシュレを読みかえすとき、あたしは五十頁もまえから、それがやってくるのを待ちうけていた。」

女のいう「特権的状态」とはなにか。

「たとえばギイズ公暗殺の場面では、図のなかの人物たちは、みんな掌を前に突きだし、顔をそむけて、驚きと憤りを現している。それはとても美しい。まるで合唱団みたい。もちろん、おもしろい細部や逸話的な部分も忘れられていない。床のうえに落ちている本とか、逃げだそうとする犬とか、玉座の階段に坐っている道化役とか。そういう細部も、図面の他の部分と調和するような偉大さと不器用さをもって描かれているの。これほど厳密な統一によって描かれている絵を、いままで見たためしがない。で、それはそこからくるの。」

「特権的状态が？」

「特権的状态というものをつくりだす観念が。そういう状態は、まったく、たぐいまれな、^{とうと}貴い性質、まあ、ひとつのスタイルをもっているといってもいい。」

女はみずから「特権的状态」と名づけるものについて、いろいろな例をあげる。「特権的状态」というのは、「完璧な瞬間」を実現するのにつごうのいい条件を具備した、とくに恵まれた状況のことである。が、それは、かならずしも歓喜へと道を通じてはいない。

死もまた「特権的状态」である。出生は生れてくるものにとって「特権的状态」になりえない。意識が参与していないからだ。私たちは自分の死を眺めることができ、これに対処しうる。が、私たちは自分の出生を眺めることができない。生れるときの私たちは、たんなる物体にすぎず、私たちは出生を自分の事件としてとりあげることができない。それが事件でありうるのは、その周囲の人間にとってだけである。それが当人にとって事件となりうるのは、後年、自分の出生を過去のできごととして顧みることができるようになってからだ。そのとき、私たちは、それがなんらかの事件となりえた周囲のひとたちを通じ、かれらと交ることによって、はじめてそれを自分の事件となしうる。私生児は、気まずい母親の表情や、意味ありげな世間のあしらいによって、はじめて私生児になる。つまり、自分の出生がひとつの事件となるのだ。

死は、最初から、いや、それがやってくるずっとまえから、私たちはそれにたいして用意することができ、出生においてはたんなる物体にすぎず、その端役さへ務められなかつた私たちも、死にさいしては、瞬間、主役になりうるのである。芝居がかった人間なら、深刻な、あるいは軽妙なせりふの一つも吐くことができよう。そうでなくとも、臨終のことばは、周囲のひとびとに

よって、意味ありげに受けとられがちなものだ。それが意味ありげにひびく土壤が用意されているからである。その用意された土壤が、女のいう「特権的状态」なのだ。

死が当人にとって不意にやってくることはあろう。それにしても、周囲の人間にとっては、それは、出生とくらべものにならぬほど、意識的な役割を演じうる機会なのである。女はふたたび少女のころの経験を物語る。父が死んだときのことだ。その死に立ちあうため、少女は病床に連れて行かれた。階段をのぼって行く。悲しかった。だが、一種の緊張感に快く酔っていたこともたしかだ。病室の戸が開かれる。少女はそのなかに呼び入れられる。

「あたしはついに特権的状态のなかに足を踏み入れた。あたしは壁によりかかって、しなければならなかった動作をしようとした。なのに、叔母と母とが、ベッドの縁に膝まずいていて、そのすすり泣きで、なにかも台なしにしてしまったんだわ。」

二人の恋愛において、それをつくりあげるのにすこしも手を貸そうとしなかった男は、いや、むしろ女の試みは無意識のうちにぶちこわしてばかりいた男は、この叔母や母とおなじだった。それを、いま、女は男に告げる。こんな話もする。昔、戦いにやぶれ、捕虜になった王がいた。その前を鎖につながれた息子や娘が通って行く。が、王は一滴の涙もながさない。一言も口をき

かない。そのあとで、やはり鎖につながれた召使が通った。それを見て、王は急に身もだえして、誰はばかることなく自分の苦しみをぶちまけた。「特権的状态」のなかにいるという自覚が、「完璧な瞬間」をつくりあげようとする意志が、にわかに崩れさったからである。

こうして、いくつかの例をあげたのち、女は、自分たちの恋愛の、最初の瞬間のことを、率直に告白する。植物園の芝のうえで、はじめて男に抱擁されたときのことだ。

「でも、あたしがいくらさのうえに坐っていたことは、おそらくあなたは知らなかった。裾がまくれて、腿がちくちくさされていた。すこしでも動くと、新しい痛みを感じた。そんなとき、禁欲主義だけでは十分じゃない。あたしはちっとも陶酔なんかしていなかったのだから。あなたの唇がほしいとおもっていなかった。あなたに与えようとしていたあの接吻のほうが、もっとずっと大切だった。それはひとつの契約、ひとつの約束だったの。わかるでしょう、腿の痛みなんて、とんでもないことだわ。そんなとき、腿のことなんか考えるのは許しがたいことなのよ。痛みには注意しないというだけでは、まだ足りない。痛がってはいけなかったんだわ。」

サルトルの小説『嘔吐』からの引用である。例はやや奇矯であるが、この女の不満は、ごくあ

りきたりのものであり、一般的なものである。だれもが経験する平俗な日常生活から、例はいくらでもあげられるであらう。

一口にいえば、現実のままならぬということだ。私たちは私たちの生活のあるじたりえない。現実の生活では、主役を演じることができぬ。いや、誰もが主役を欲しているとはかぎらぬし、誰もがその能力に恵まれているともかぎらぬ。生きる喜びとは主役を演じることを意味しはしない。端役でも、それが役であればいい、なにかの役割を演じること、それが、この現実の人生では許されないのだ。

私たちは日々の労働で疲れてくる。ときには生氣に満ちた自然に眺めいりたいとおもう。長雨のあとで、たまたまある朝、美しい青空にめぐりあう。だが、私たちは日の光をしみじみ味わってはいられない。仕事がある。あるものは暗い北向きの事務所に出かけて行き、そこで終日すごさなければならぬ。そのあげく待っていた休日には、また雨である。親しい友人を訪ねて、のんきな話に半日をすごしたいとおもうときがある。が、行ってみると、相手はるすである。そして孤独でありたいとおもうときに、かれはやってくる。

愛憎は裏切られ、憎しみは調停され、悲しみはまぎらされ、喜びは邪魔される。相手がなければ愛情も起らぬが、相手があるがゆえに、愛憎は完成されない。邪魔をし、水をさすものが、かならず出てくる。父の病床で自分の悲哀を完全に掬みつくそうと用意していた少女のまえには、

節度なく泣きくずれる叔母や母がいる。芝生のうえで接吻の儀式を完成しようとした女の下には、心ないいらくさがあった。さらに、自分の役割を理解し協力してくれぬ恋人がいた。

私たちの社会生活が複雑になればなるほど、私たちは自分で自分の役を選びとることができない。また、それを最後まで演じきって、去って行くこともできない。私たちの行為は、すべて断片で終る。たえず、ひとつの断片から他の断片へと移っていく。その転位は必然的な発展ではない。たんなる中絶である。未来はただ現在を中断するためにだけやってくるのだ。現在が中断されることによってしか未来は起りえず、未来とはたんに現在の中断しか意味しないのである。が、私たちは、現在の中断でしかない未来を欲してはいない。そんなものは未来ではないからだ。私たちの欲する未来は、現在の完全燃焼であり、それによる現在の消滅であり、さらに、その消滅によって、新しき現在に脱出することである。私たちのまえには、つねに現在しかない——そういう形で、私たちは未来を受けとりたい。中断された現在のあとに、真の未来があるはずはない。喜びにせよ、悲しみにせよ、私たちは行けるところまで行きつくことを望んでいる。そして行為が完全に燃焼しきったところに無意識が訪れる。きょうとあすとのあいだに、夜の睡眠があるように。ロレンスが性を人間生活の根柢においたのは、そのことと無関係ではない。かれはフロイトに学んだかもしれないが、フロイトのように性を科学としてとらえることをしなかった。ロレンスにとって、性はあらゆる人間行為のうち、もっとも純粋な行為なのである。のみならず、断

片と化した現代の複雑な社会生活において、まだそこでだけは、なんびとも主役を演じうる最後の拠りどころなのである。

性の原理は単純である。そこにおいては、自我が完全に消滅し、同時に、自我を十全に主張しうるということだ。あらゆる身体的行動は、他の人間なり物体なりを、自己の支配下におくことを意味し、それにともなう興奮にささえられている。いらだちや身もだえさえ、やはり自己の生理を自己の支配下におこうとする、いわば肉体のうちに残された最後の意志かもしれない。私たちは、自我の喪失と逸脱とを恐れているのである。もし性の行為を、一方的に異性の征服と見なせば、これほど支配しにくい対象はない。このばあい、私たちは、相手のなすがままにふるまうて、しかも完全に相手を裏切ることができるのである。性の行為が完全であるためには、私たちは征服者であると同時に、被征服者にならなければならない。主体であると同時に、客体であらねばならず、完全に精神であると同時に、完全に肉体であらねばならない。のみならず、無意識の陶醉に達するため、その瞬間まで、私たちの意識は極度に集中され、緊張しきっていないければならぬのである。私たちは焰であると同時に薪であらねばならぬのだが、その完全燃焼のためには、二つの性の内側から発するもの以外に、なんの要因も必要としないばかりか、それを中断するいかなる要因の介入も許さない。

ひとはロレンスがそこまで後退したと非難するかもしれぬ。が、現代の社会生活が私たちの生

活を断片化してしまい、純粋な生命の燃焼を許さなくなっている実情を、ロレンスは敏感に感じとっていたのである。かれにとっては、妥協や迂廻ががまんできなかつた。それほど、かれは純粋な行為を欲した。ロレンスの思想を後向きと見なすことは容易である。が、多くのひとびとは、日々の行為がたんなる断片にすぎず、ひとつひとつが充実し燃焼しきることなしに、断片から断片へと追いやられているにもかかわらず、その事実を自覚するいとまもなく、その苦痛を苦痛と感ずる神経のこまかさすら失ってしまったているのだ。が、無意識のうちに、不満は堆積する。

もちろん、それを解放しようとする試みがないではない。が、その試み自体が断片的性格をおびてくるのである。勇敢なひとたちがいる。かれらは後退しない。断片としての不完全な現在の組み変えによって、未来に期待する。前向きに、つぎからつぎへと未来を迎え、それが現在になった瞬間、その断片としての不完全性のゆえに、それをつぎつぎと過去に送りこむ。そして、この未来を現在に呼びだし、過去に追放する営みが、新しき未来にたいする希望という美名を冠せられる。ふしぎな現代の錬金術である。かれらのまえに現れる未来も現在も、依然として断片にすぎない。かれら自身も断片的存在に終るしかあるまい。かれらはそれを自覚していない。いや、自覚しているという。それで不満はないという。が、はたしてそうであらうか。

現在が未来に脱け変わるのではなくて、未来が現在を押しつけてやってくるころでは、その不明瞭な未来の幻影のまえで、現在はずねに不燃焼のまま残り、過去の穴倉で腐敗する。満足とか

不満とかいうものは、なんら本人の自覚とかかわりがない。自覚されぬ不満こそ、ここでは問題なのである。本人の自覚のうちにとりいれられた不満や不幸が、そのひとの致命傷になったためにはない。そういう不満や不幸は、味わい楽しむことさえできる。むしろ、今日では、すべての不幸や不満が私たちの自覚のうちに組み入れられ、もっぱらその解決策にかかずらっている私たちの背後に、別のどうしようもない不満や不幸が忍びよっているのではないだろうか。

自然のままに生きるという。だが、これほど誤解されたことばもない。もともと人間は自然のままに生きることを欲していないし、それに堪えられもしないのである。程度の差こそあれ、だれでもが、なにかの役割を演じたがっている。また演じてもいる。ただそれを意識していないだけだ。そういえば、多くのひとは反撥を感じるであろう。芝居がかった行為にたいする反感、そういう感情はたしかに存在する。ひとびとはそこに虚偽を見る。だが、理由はかんたんだ。一口にいえば、芝居がへたなのである。

役をはきちがえたり、相手役や見物に無理なつきあいを強いたり、決るところで決らなかったり、自分ひとりで芝居をしたり、早く出すぎたり、引っこみを忘れたり、見物の反応を無視したり、見物の欲しない芝居をしたり、すべてはそういうことなのだ。だれでもが、なにかの役割を

演じたがっているがゆえに、相手にもなにかの役割を演じさせなければならない。ときには、舞台を降りて、見物席に坐ることを許さなければならぬし、自分もそうしなければならぬ。

舞台をつくるためには、私たちは多少とも自己を偽らなければならぬのである。堪えがたいことだ、と青年はいう。自己の自然のままにふるまい、個性を伸張せしめること、それが大事だという。が、かれらはめいめいの個性を自然のままに生かしているのだろうか。かれらはたんに「青春の個性」というありきたりの役割を演じているのではないか。私にはそれだけのことしかおもえない。

個性などというものを信じてはいけない。もしそんなものがあるとすれば、それは自分が演じたい役割ということにすぎぬ。他はいつさい生理的なものだ。右手が長いとか、腰の関節が発達しているとか、鼻がきくとか、そういうことである。

また、ひとはよく自由について語る。そこでもひとびとはまちがっている。私たちが真に求めているものは自由ではない。私たちが欲するのは、事が起るべくして起っているということだ。そして、そのなかに登場して一定の役割をつとめ、なさねばならぬことをしているという実感だ。なにをしてもよく、なんでもできる状態など、私たちは欲してはいない。ある役を演じなければならず、その役を投げれば、他に支障が生じ、時間が停滞する——ほしいのは、そういう実感だ。私たちが自由を求めているという錯覚は、自然のままに生きるというリアリズムと無関係ではあ